

園番号 710

令和6年度 奈良市立高円こども園 研究実践概要

園長名 織田 由起子
全園児数 101名

1. 研究主題

『『おもしろい』『またやりたい』と心動かし、意欲的に遊ぶ子どもを目指して』
～豊かな環境と人との関わりの中で～

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

初年度の研究成果から、子どもの実態に即した環境とともに保育者の援助の在り方が大切であると再確認した。子どもの姿を見取り「おもしろい」「またやりたい」と思う気持ちを育み、子どもが満足感や達成感を感じたり、友達との繋がりに喜びを感じたりできるような、環境と援助を探るため研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもの姿や発達・興味・関心に合わせ、物的環境と共に人的環境を工夫し、子どもの遊びが“人との関わりの中で”より豊かになり、意欲的に遊ぶことができる環境を探っていく。

②研究の重点

- ・子ども一人一人の発達、実態を把握し、ねらい・目標・育てたい力を明確にし、園内研修やカリキュラム会議等で職員同士が意見を出し合い、学び合いながら意欲的に遊ぶことのできる豊かな環境づくりに取り組む。
- ・子どもが「もっとやってみよう」「こんなふうにしたい」という思いをもち、考えたり、試したり、目標をもって取り組めるよう、保育者自身が大切な環境であることを常に意識し、援助や応答的な関わりを丁寧に行い、子どもの遊びがより豊かになるように取り組む。

③活動の方法

事例の中の下線は、

_____：子どもの実態 ~~~~~：保育者の意図・工夫 _____：その後の子どもの姿 とする。

【0歳児】 「せんせい、ここよ！」 10月

歩行が安定してきたり、ハイハイでの行動範囲が広がってくると、保育者が「こっちよ！」と逃げていたり、コーナーの後ろなどに隠れようとする姿を大喜びで追いかけたり、見つけたりして楽しむようになった。
そこで“かくれんぼ”遊びを楽しみたいと思い、中に入ったり、かくれたりすることができるような手づくりの段ボールボックスをいくつか用意した。すぐに興味を示し、中を覗き込んだり、入ってみたり、箱から箱へと移動し始めた。子どもが箱の中に入ったタイミングで「あれ、〇〇ちゃんどこ？」と保育者が探す素振りをすると、その様子を見て、箱の小窓から“ここよ！”と言わんばかりの満面の笑顔で顔をみせた。見つけられると声を出



して笑って箱から飛び出し、保育者と抱き合うことを喜んだ。保育者とのやりとりやスキンシップが楽しくて“もう一回！”と何度も繰り返し楽しんだ。

〈考察〉

“いないいないばあ”遊びを通して、保育者との触れ合いを存分に楽しんできたことで、子ども遊ぶ様子や育ちに合わせた遊具の提供と、愛情豊かで応答的な関わりにより、子ども達は保育者の言葉や表情・動きに注目しながら遊ぶことを楽しめるようになってきた。遊びの面白さを感じながらワクワクする気持ちを膨らませ“もっとしたい！”“もう一回！”と、保育者と心を通わせながら遊ぶ姿に繋がっていった。

【1歳児】 「これなあに？」 12月

自然物に触れる機会が少なかったため、自然物へ興味をもってほしいと思い、落ち葉があるところへ散歩へ行く機会をつくった。たくさんの落ち葉と色づいた大きな木を前にして、きょとんとしていた子ども達だったが、保育者が落ち葉を手に取り、「綺麗な赤色やね。」と拾い集め始めると、子ども達も手に取り始め、落ち葉の中を歩くことで音がすることに気付き「あっ！」と驚いたり、小刻みに足踏みをしたりし始めた。保育者がその音に「いい音がするね。」と声を掛けると、きやつきやつとはしゃぎながら落ち葉の上を歩きだす子どももいた。集めた落ち葉を握ることでパリパリとした感触を発見した子どもには「パリパリいってるね。」と一緒に驚いたり、一緒に落ち葉を握って音をたくさん鳴らしたりして遊んだ。その後、園庭の環境を工夫し、働きかけたことで、自然物への興味が広がった。



〈考察〉

自然物のおもしろさ、不思議さに気付けるよう保育者が表情豊かに自然物に触れ、子どもの気付きに言葉を添え、思いをくみ取り共感的に関わることで、落ち葉遊びに繋がった。この経験から園庭の環境を整え、保育者が子どもと一緒に触れたり遊んだりすることで、より興味が広がり身近な大人を通して興味や関心を広げていることを実感した。また、これまでいろいろな感触遊びや運動遊びを楽しみ積み重ねてきたことで、木の実をつまみ上げたり、葉っぱを指先でつぶしたり、落ち葉の上をバランスを崩さず歩いたりして楽しむなどの遊び方に繋がったと考える。

【2歳児】 「ドングリコロコロ～いい音ねえ」 11月

室内で遊んでいる転がし遊びを園庭でも楽しめるよう、トイ、ベニヤ板、波板、ドングリを準備した。A児はドングリが転がり終わるのを最後まで見届け、落ちた時の様子を「音がしたね」「ポンッていった！」と保育者に伝えた。「音が聞こえたね。ポンッて面白い音がしたね」とA児の気付きや思いに応えていき、ドングリが落ちる時の音をもっと楽しめよう金ダライで受けるようにした。ドングリが金ダライに落ちると『カンッ』と少し尖った音が響き、一度にたくさんのドングリを転がすと音も連続して鳴った。音が聞こえるまでドングリの行方を見守り、必ず保育者の顔を見るA児。「おもしろい～。もう1回。」と繰り返し遊び、「先生もどうぞ」と保育者にドングリを渡した。そして「ほら、(一緒に音を)聞いて」と保育者の顔を見ながら耳に手を当て、耳を澄ます仕草をした。保育者と一緒に音を聞き、ケラケラと笑いながら繰り返し楽しんだ。



〈考察〉

A児はドングリが転がる様子や落ちた時の音に強い興味をもち、観察しながら遊んでいることに気付いた。その音をより楽しめよう金ダライを用意するとともに、A児の見せる表情や言葉、保育者に繰り返し伝える『先生も一緒にやろう』に応えていった。安心感と信頼関係の元で保育者と一緒に遊ぶ楽しさを感じたことで、繰り返し遊ぶ姿に繋がったと考える。

【3歳児】 「焼きそばしたいけど」 9月

保育室でバーベキューごっこが始まった時、他児は楽しんでいる中、A児は「焼きそばしたいけど、網やったら落ちちゃうやん」とつぶやき、見ていただけだった。保育者は何気なくA児がつぶやいた一言を聞き逃さず、次の日にはホットプレートやヘラ、毛糸の麺を数種類準備しておいた。また、製作コーナーをバーベキューごっこに近づけ、カットした画用紙や緩衝材などが目につきやすい位置にあるように環境を設定しておいた。翌日に登園したA児は、すぐにホットプレートなどに気付き、遊び始めた。「焼きそばには何が入っているかな？」と、A児や周りの友達に尋ねると「キャベツいるかな」などと答えが返ってきたため、一緒に具材にできる素材を探し、焼きそばをつくって食べるまで保育者や友達と共に楽しんだ。A児は、翌日以降もつくったり「焼きそば屋さんですよ」と友達に振舞ったりして、お店屋さんごっこを継続して楽しんだ。



〈考察〉

子どものちょっとしたつぶやきを見逃さず、焼きそばづくりに広がりそうな素材を目につく場所に準備したことと、製作コーナーを近づけ具材を足したいと思った時に簡単に実現できる素材が手に取りやすい位置にあったことで、やってみようとする姿が見られた。また、保育者が環境の一部であることを意識し、イメージが広がるように具体的に問いかけたり、最後まで一緒にやり遂げたりしたことが、満足感や次への意欲、友達との関わりに繋がったと考えられる。

【4歳児】 「泥固まった！」 6月

雨の翌日に園庭にできた水たまりで泥遊びを楽しんだ。「トロトロ〜」「気持ちいい」と手足から泥の感触を存分に楽しんだ子ども達。翌日も「泥遊びしよう！」と園庭に出ると、「先生！固まっている！」とカチカチになった泥を発見した。いつも触っている砂とも、昨日遊んだ泥ともまた違う感触に「全然割れへん！」「かった〜」と驚きの様子。「本当だね」と保育者も子ども達の驚きを受け止め、様子を見守る。「ここも固まっているよ！」と、前日、ベニヤ板に泥投げをして遊んだ場所でも、固まった泥の大きな塊を発見。手で、バキバキと割ってみるとパラパラと崩れていく様子が面白く何度も繰り返していた。ごちそうづくりに使いたい様子の子供達に、保育者は「こんなのはどう？」と、さら砂（細かな砂）づくりに使っている“ふるい”を渡してみると、上でゴリゴリと砂をこするようにし始めた。泥の塊がさらさらと細かな砂となり、たくさん出てくる様子が面白く、「僕もやってみよう」と、友達が集まってきた。「見て見て」「ほら、さわって！」と、泥の塊からできたさら砂を嬉しそうに友達や保育者に見せ伝えた。



〈考察〉

雨の翌日など、園庭の環境を見てタイミングよく遊びに誘うことで、泥遊びをふんだんに楽しむ姿に繋がった。裸足になり手足から泥の感触を存分に味わう経験をしたからこそ、変わっていく泥の不思議さに気付くことができたと思う。また、変化する不思議さに気付き、それを使って遊ぶ楽しさを感じられるように、さりげなく素材や道具を用意したり、子どもの驚きの様子に共感したり、気付きを周りの子ども達に発信したりすることで、より自分の思いを友達や保育者に伝える意欲となり、遊びや楽しさが広がったと思う。

【5歳児】 「水をかけて固めたらいいんちゃう」 9月

砂場の少し山のように盛り上がっている部分を火山に見立て、「噴火させたい」と遊びが始まった。噴火させる方法をみんなで考え、火山の中にホースを通してみることになった。穴を掘っていくが、途中で崩れてしまう。するとA児から「水をかけて固めたらいいんちゃう」とアイデアが出た。保育者は「良い考えだね」と受け止め、友達にも知らせてみるように促すと「私

ここ固めるから、水かけて」「わかった水とってくる」「一緒に固めよー」と声を掛け合い、自然と役割分担をしながら火山をつくっていった。翌週、園庭に出ると一目散に火山を確認し「カチカチや」と固まったことを喜び、再度ホースを通すための穴掘りが始まった。掘り進める時も「上から掘るから、下よろしく」「順番に掘ろう」などと声を掛け合い、A 児も「全然崩れてこやへん！」と誇らしげに友達に伝えていた。ついに穴が繋がり、ホースを通し火山が噴火した時には「うわー噴火したー」と顔を見合わせて喜び合っていた。



〈考察〉

遊びの中で「うまくできない」「こうしてみたい」という思いをまず保育者に伝えることが多く、自ら友達に伝える姿が少なかった。一人一人の気付きや考えなどを十分に受け止めながらも、友達とアイデアを出し合ったり認め合ったりしながら遊びを進めていく楽しさや面白さを感じてほしいと思い、友達にも知らせることを促し、友達同士の関わりが深まっていくよう意識して関わった。この事例では、保育者の促しで A 児のアイデアが友達に届き、連鎖するように周りの友達の思いや考えが引き出されたと考える。また 役割分担にも繋がり、協力してやり遂げる達成感も感じられた。一つの目標に到達する過程で成功体験を積み重ねることができた。

【長時間】 「そーっと渡っているね」 8月

夏休み中、週に数回異年齢の友達とサーキットで遊ぶ機会を設けた。3 歳児は平均台を渡ることに自信がなく、避けていく様子も見られていたが、保育者は少し難しいことにも挑戦してほしいとの思いがあった。保育者は一緒に平均台を渡ったり、「そーっと渡っているね」と4 歳児の姿を見られるように声を掛けたりした。「先生一緒に」「手つないで」から始まり、やってみたいという意欲が出てきて、何度も繰り返し渡ってみる姿が見られた。その姿を見た同じクラスの子や4 歳児が、保育者のように「手つなぐ？」と手を差し出したり、できたことを一緒に喜んだりしていた。何日も繰り返すことで平均台を一人で渡って行く姿が見られるようになった。また、4 歳児や同い年の友達が優しい気持ちで関わる姿にも繋がった。



〈考察〉

初めは自信がなかった 3 歳児だったが、保育者の援助を受け挑戦してみようという気持ちが出てきた。また、友達や 4 歳児の援助もあったことで、より意欲が出て、一人で渡って行く姿にまで繋がったと考える。4 歳児は 5 歳児との関わりの中で優しくしてもらった経験から、遊ぶ前から 3 歳児に対して「優しくしたい」と意気込んでいた。そこで平均台に恐る恐る挑戦する姿や保育者の援助を見て、手を差し出す行動に繋がったと考える。保育者や異年齢の友達との関わりの中で、憧れややってみようとする気持ち、思いやる気持ちや優しさが育っていると考えられる。

5. 研究の成果

子どもの姿から、魅力ある環境を探るとともに、保育者自身も大切な環境であることを意識してきた。子どもの思いを汲み取り共感したり、信頼関係のもと表情豊かに応答的に関わったりしたことで、興味や関心が広がった。また、周りの友達の遊びの様子に気付けるよう関わったことで、友達から刺激を受け、子ども達が自ら試したり、繰り返し挑戦したりする姿に繋がった。

6. 今後の課題

今後も、遊びのねらいや育てたい力を明確にし、子どもが心を動かしている瞬間や、意欲的に遊んでいる姿から興味や関心を見取り、必要な環境をその都度再構成することが大切だと考える。また、直接的な援助をするだけでなく、必要に応じて見守ったり、関わり方を工夫したりすることで、子ども自らが友達と遊びをつくり出し、子どもが満足するまで遊び込む経験や成功体験を積み重ねていきたい。引き続き、でいあしーとの読み解きやカリキュラム会議、園内研修などを通して、職員間で子どもの育ちや発達の繋がりを共通認識し、一人一人に寄り添った関わりをしながら、主体的に遊ぶ子どもを育成していきたい。